第4章　遺物の考察

1　考察の方法

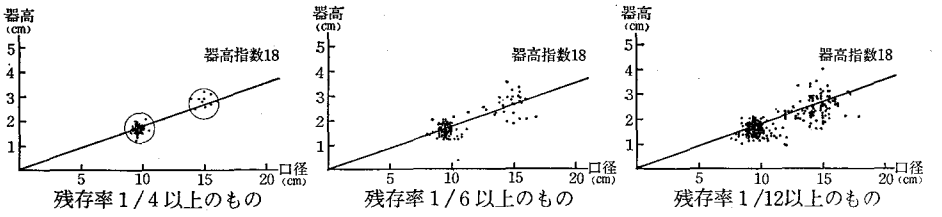
出土遺物の整理は，前章で示した種類と器種とに分け，遺構・層位での共伴関係をもとにして変化を考察する方法で行なっている。そして各器種別の変化と共伴関係をもとにして土器様式を設定することが第1の課題であるが，消費地の研究においては，各種類・各器種の土器・陶磁器がどのような比率で用いられたかを知ることが重要である。そのためには土器・陶磁器の個体数を算出しなくてはならないが，これを異なる方法で計算すると数値に大きな差を生じる場合がある。

個体数の計算は，個体識別によって行なうことが最も正確であるが，本調査区で出土した土器・陶磁器類は数十万片を数える。この個体を識別することは事実上不可能であり，また土師器・須恵器・陶磁器の種類の別によって識別の精度が変わる。また破片数の計算は，おおよその傾向を知るには有効であるが，破損の程度によって誤差を生じやすい。そこで本報告書では，異なる種類・器種の土器・陶磁器について，ほぼ同一の精度で計算でき，大量の資料の処理が可能である口縁部計測法によって個体数の計算を行なった。まずその方法を示す。

口縁部計測法　（1）出土した土器・陶磁器を接合した後，口縁部を含むものをすべて抽出する。（2）抽出した土器・陶磁器を遺構・層位ごとに，種類と器種とに分け，分類を行なう。（3）分類した土器・陶磁器の口径と器高と残存率（残存する口縁周の長さ／復原した口縁全周の長さ）を計測する。（4）種類，器種，分類，法量を同じくする土器・陶磁器の残存率を合計し，その個体数とする。なお，残存率の計算は，以下のように行なった。半径5㎜間隔の同心円を描き，この同心円を15°ずつ24分割する。計測する口縁部片を該当する円周上におき，全周に対する比率を読みとった。また同じ器種に属するものは法量を口径で区別し，5㎜ごとに残存率を合計した。（例：土師器・皿・A_1類・口径14.5㎝以上15.0㎝未満・1/3破片→3点で1個体と計算）

口縁部計測法は，口縁部の平面形が円形であるものについては，種類と法量と破損の程度が異なる大量の土器の個体数をほぼ同じ精度で計算できる。また土器・陶磁器の考察には，口縁部の分類が有効であるという利点がある。ただし口縁部は破損して失われやすいという欠点もある。陶磁器の高台や高杯の軸部のように破損しにくい部分で個体数を計算

表4　計測値の誤差（ＳＥ22出土の土師器皿）



すると，口縁部計測法によるより多い数値を得ることがある。これは口縁部計測法で得た個体数の総量を補正する手掛かりとなるが，各種類・各器種の土器・陶磁器が占める比率の計算には口縁部計測法による数値が有効である。

計測値の利用　　遺跡から出土した土器を考察する場合，より小さな破片に至るまで，分類・計測の対象にすることが望ましいが，小さな破片の計測値は誤差が生じやすく不正確であることが多い。

表４は計測値の誤差を法量表で示したものである。残存率1/6未満のものを含めると数値は分散するが，同1/6以上は比較的まとまり，同1/4以上に限ると口径の計測がより正確になるので，一定の範囲に集中することが判る。

他方，遺物の破損の程度は遺構の種類や埋積の状況によって大きく異なるが，本調査区で発掘例が多い井戸の遺物の個体数についてみると，1/6以上のものは1/12以上のものの70～80%程度であることが多いのに対して，1/4以上のものに限ると40%以下になる例が多い。

このことから本報告書では残存率1/6以上の土器・陶磁器の計測値を用いることとし，1/6未満で重要なものについては別に示した。

なお，本調査区の遺構出土品で分類・計測の対象としえた土器・陶磁器の口縁部破片総数は5204点(土師器88.9%，須恵器2.8%，瓦器椀・皿1.2%，その他の瓦器2.5%，灰釉系陶器2.0%，白磁1.1%，青磁0.6%，青白磁0.1%，その他0.8%)であり，これを口縁部計測法で完形品に換算すると794.8個体分(土師器98.4%，須恵器0.2%，瓦器椀・皿0.4%，その他の瓦器0.5%，灰釉系陶器0.2%，白磁0.2%，青磁0.1%)である。このうち，残存率が1/6以上の破片数は1825点(土師器98.8%，須恵器0.1%，瓦器椀・皿0.3%，その他の瓦器0.4%，灰釉系陶器0.2%，白磁0.1%，青磁0.1%)であり，完形品に換算すると458.3個体分である。本章第６節では，この458.3個体分について，種類及び器種の構成比率を時期別に示す。

2 土 師 器

土師器は供膳用のものが主であり，その時期区分の大略は表2（P27)のようにまとめることができる。この各期は，口縁部形態(調整)と法量の変化とによって3～5の小期に分けることができるが，まず基本となる口縁部形態の分類を示す。

(1) 土師器の分類(表5)

土師器杯・皿・椀の口縁部は形態と調整とによって次のように分類することができる。

A類(外面篦削り手法)

A_1類：口縁部に幅広い横撫でを施す(b手法)。

A_2類：口縁端部にまで篦削りを施す(c手法)。

A_3類：口縁端部にまで篦削りを施すが，口縁端部外面直下に横撫でが残る。

B類(「て」字状口縁手法，e手法)

B_1類：口縁端部に1段の横撫でを施す。撫で部分の外反が弱く，器壁が薄い。

B_2類：口縁端部の撫で部分が強く外反し，端部を内側に肥厚させる。器壁が薄い。

B_3類：撫で部分の外反が強く，端部を内側に肥厚させるが，器壁が厚い。

B_4類：撫で部分の外反と端部の肥厚が弱く，器壁が厚い。

C類(2段撫で手法)

C_1類：口縁部に2段の横撫でを施し，上段の撫での部分が外反する。器壁が薄い。

C_2類：上段の撫での部分が弱く外反し，器壁が厚い。

C_3類：上段の撫での部分が弱く内彎し，端部が丸い。

C_4類：上段の撫での部分がつまみ上げたようになる。

C_5類：口縁端部に面取りを施す。

D類(1段撫で手法a群)

D_1類：口縁部に1段の横撫でを施し，外反させる。口縁端部は丸い。

D_2類：口縁部に1段の横撫でを施し，直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。

D_3類：口縁部に1段の横撫でを施し，弱く内彎させる。口縁端部は丸い。

D_4類：口縁部に1段の横撫でと端部面取りを施し，弱く内彎させる。

D_5類：1段撫でと口縁端部面取りを施すが，直線的で底部との境が屈曲する。

D_6類：1段撫でと口縁端部面取りを施し，直線的。器壁がやや薄い。

E類(1段撫で手法b群)

E_1類：口縁部に1段の横撫でを施す。直線的に立ち上がり，端部が丸く，器壁が薄い。

E_2類：1段撫での部分が弱く外反し，端部を内につまむ。

E_3類：1段撫での部分が外反し，端部を丸くおさめる。

表5 土師器杯・皿・椀の口縁部分類(1)

分類	例	備考	
A_1類		横撫でを施す （b手法）	外面篦削り手法 （杯・皿・椀）
A_2類		篦削りを施す （c手法）	
A_3類		1段の横撫で ＋篦削り	
B_1類		弱く外反し 器壁が薄い	「て」字状口縁手法 （杯・皿）
B_2類		強く外反し 器壁が薄い	
B_3類		強く外反し 器壁が厚い	
B_4類		弱く外反し 器壁が厚い （宇野78b_2類）	
C_1類		強く外反し 器壁が薄い	2段撫で手法 （皿）
C_2類		弱く外反し 器壁が厚い （宇野78a_2類）	
C_3類		弱く内彎し 端部が丸い	
C_4類		上段をつまみ 上げて撫でる （宇野78a_4・b_4類）	
C_5類		口縁端部に 面取りを施す （宇野78a_3・b_3類）	

土師器杯・皿・椀の口縁部分類(2)

D_1類		外反し 端部が丸い	1段撫で 手法a群 (皿・小量の椀)
D_2類		直線的で 端部が丸い	
D_3類		弱く内彎し 端部が丸い	
D_4類		口縁端部に 面取りを施す (宇野78a_5・b_5類)	
D_5類		直線的で 端部面取り (宇野78a_6・b_6類)	
D_6類		端部面取り 器壁が薄い	
E_1類		直線的で 端部が丸い	1段撫で 手法b群 (皿・椀)
E_2類		弱く外反し 端部を内につまむ (宇野78a_{10}・b_{10}類)	
E_3類		弱く外反し 端部が丸い (宇野78a_7類)	
E_4類		外反し、横撫で 下端部が肥厚する	
F_1類		端部が丸く 器壁が厚い	1段撫で 手法C群 (皿・小量の椀)
F_2類		直線的で撫での 部分が外反する	
F_3類		直線的で 端部をつまむ	
F_4類		直線的で 器壁が薄い (宇野78a_8類)	

(京文研78，同志社調査会78，京大埋文研78・80，本報告書から作成した)　縮尺 1/4

E_4類：1段撫での下端部が肥厚し，以下に強い指圧痕を残す。

F類（1段撫で手法c群）

F_1類：口縁部に一段の横撫でを施し，口縁端部が丸い。直線的で器壁が厚い。

F_2類：直線的に低く立ち上がり，撫での部分が弱く外反して，口縁端部をつまむ。

F_3類：直線的に立ち上がり，口縁端部をごく弱くつまむ。

F_4類：直線的に立ち上がり，口縁端部を丸くおさめる。器壁が薄い。

以上の各類は，本調査区から出土した土師器を検討するため，平安京とその周辺の地域から出土する平安～室町時代の土師器杯・皿・椀の代表的なものについて，口縁部形態（調整）を分類したものである。A～Fの各類は，必ずしも時期差を示すものではなく，器種や法量によって分類した中で各類が占める比率の変化に時期差が読みとれる（表2）。なお本分類にあたるものは，平安前・中期ごろには畿内に広く分布する。以後は山城以外での出土例が少なくなり，室町中・後期ごろには，山城以外でもしばしば出土する。

（2） 法 量

法量についての考察は，時期幅の大きい資料や計測誤差のあるものを除き，良好な一括遺物で完形品を多数含むものによらなければならない。本報告書では残存率1/6以上のものについて基礎資料を作成したため，法量については若干の誤差を含むと予想される。これを補正するため，口径1.0cmごとの個体数を示すグラフを法量表に付した（表6～12）。このグラフで個体数が急激に増加する法量を1つの規格とみなし，大きなものからAⅠ・AⅡ……とする。

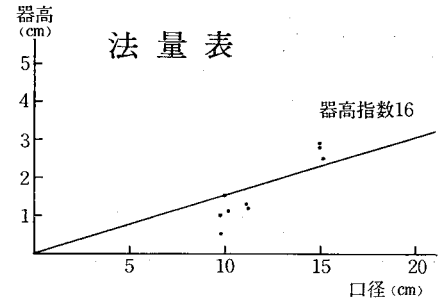
（3） 土師器の変化

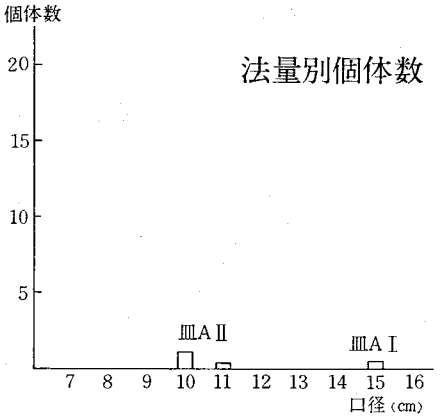
本調査区で得られた遺構出土品には，良好な一括遺物と考えうるものと，時期幅のある遺物からなるものとがある（P89表20）。このうち比較的良好な資料である，平安京Ⅲ期のSE25，平安京Ⅳ期のSE22・SE30・SD13，中世京都Ⅰ期のSD11上層・SD06，中世京都Ⅱ期のSK10出土品をとりあげて考察を加えることにする。

SE25（表6，P28） 本遺構は遺物の出土量が少なく，口縁部形態の比率と法量とを問題にするには十分ではないが，平安京Ⅳ期の資料との差をみるために示す。皿AⅠは口径15cm（口径14.5cm以上15.5cm未満のもの）に中心があり，口縁部形態はC_2類が多数を占める。皿AⅡは口径10cmに中心があり，11cmのものもある。口縁部形態はB_4類が46.4%，C_2類が11.9%，C_4類が41.7%である。

平安京Ⅲ期の土師器皿は，2段撫で手法（C類）の大型皿AⅠと，「て」字状口縁手法（B

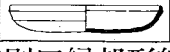
表6　ＳＥ25出土の土師器Ⅲ
（平安京Ⅲ期新段階）





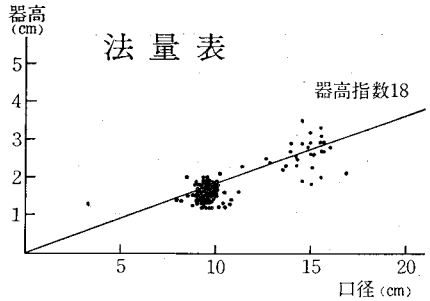
口縁＼口径	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
B_4類	—	—	—	63.4	0	—	—	—	0	—
C_2類	—	—	—	0	44.4	—	—	—	100	—
C_4類	—	—	—	36.6	55.6	—	—	—	0	—

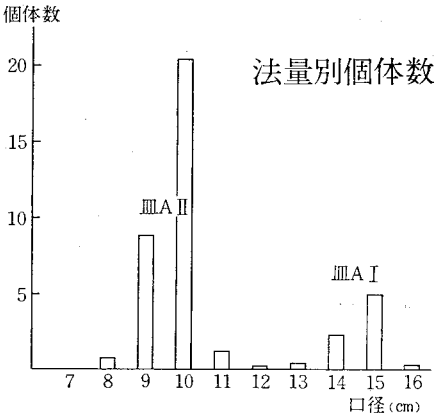
法量別口縁部形態の比率(単位%)

口縁＼規格	口縁例	ⅢAⅡ	ⅢAⅠ
B_4類		46.4%	0%
C_2類		11.9%	100%
C_4類		41.7%	0%

規格別口縁部形態の比率

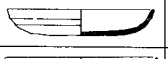
表7　ＳＥ22出土の土師器Ⅲ
（平安京Ⅳ期古段階）





口縁＼口径	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
C_3類	—	0	6.2	11.7	0	0	50	34.0	15.5	0
C_4類	—	0	0	2.1	0	0	50	20.8	6.9	0
C_5類	—	25	5.2	13.4	14.8	0	0	7.5	49.6	100
D_3類	—	25	11.0	8.2	0	0	0	0	0	0
D_4類	—	50	77.6	64.6	85.2	100	0	37.7	28.0	0

法量別口縁部形態の比率(単位%)

口縁＼規格	口縁例	ⅢAⅡ	ⅢAⅠ
C_3類		10.1%	21.3%
C_4類		1.4%	11.1%
C_5類		10.9%	36.5%
D_3類		9.0%	0%
D_4類		68.6%	31.1%

規格別口縁部形態の比率

類)の小型皿AⅡとを基本の組合せとする。ただし皿AⅠにも1段撫で手法(D類)のものが小量あり，皿AⅡではB類が比率を減じてC・D類が増加する。SE25出土品は，「て」字状口縁手法の皿AⅡが末期的なB_4類であり，比率も小型皿全体の50%以下になっていることから，平安京Ⅲ期新段階に属することが判る。

SE22(表7，P28)　皿AⅠは口径15cmに中心があるが，SE25に比して14cmのものが増加する。口縁部形態は，C_3類が21.3%，C_4類が11.1%，C_5類が36.5%，D_4類が31.1%であり，2段撫で手法(C類)のものが主である。皿AⅡは口径10cmに中心があるが，SE25より9cmのものが増している。口縁部形態は，C_3類が10.1%，C_4類が1.4%，C_5類が10.9%，D_3類が9.0%，D_4類が68.6%であり，1段撫で面取り手法のもの(D_4類)が主である。

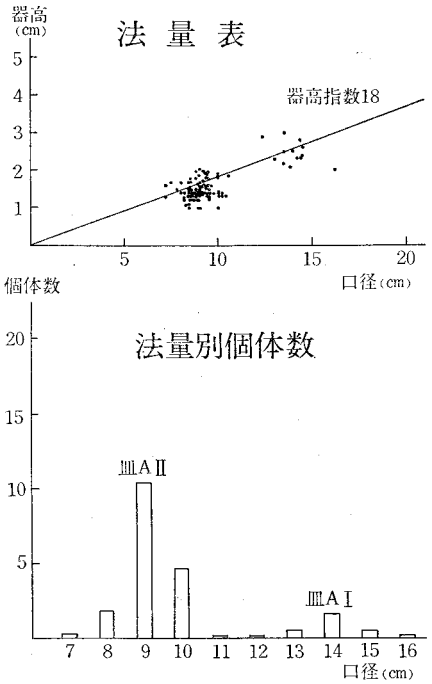
SE30(表8，P30)　皿AⅠは口径14cmに中心がある。口縁部形態はC_3類が12.3%，C_5類が33.9%，D_3類が12.3%，D_4類が41.5%であり，1段撫で手法(D類)のものが約半数を占めている。またC類では2段撫で面取り手法(C_5類)のものが主体をなす。皿AⅡは口径9cmのものが10cmのものより多くなる。口縁部形態はC_3類が4.9%，C_4類が6.1%，C_5類が3.5%，D_3類が12.1%，D_4類が73.4%であり，1段撫で面取り手法のものが，SE22よりさらに増加する。

SD13(表9，P31)　皿AⅠは口径14cmのものが大多数を占める。口縁部形態はC_3類が12.9%，C_4類が2.8%，C_5類が33.2%，D_4類が51.1%であり，皿AⅠでも1段撫で面取り手法(D_4類)が主体をなすようになる。また数値的には2段撫で面取り手法(D_5類)のものが，30%以上を占めているが，SE30と比較すると2段撫での稜が明確でなく，1段撫で手法のものとの識別が難しいものが多くなる。皿AⅡは口径9cmのものがほとんどである。口縁部形態は，C_3類が9.2%，D_3類が14.8%，D_4類が76.0%であり，1段撫で手法(D類)のものが90%以上を占めるようになる。

平安京~~Ⅲ~~Ⅳ期は，「て」字状口縁手法(B類)の皿がなくなり，2段撫で手法(C類)の大型皿AⅠと1段撫で手法の小型皿AⅡを基本の組合せとするが，皿AⅠでもD類，特に1段撫で面取り手法のもの(D_4類)が増加していく。この変化は皿AⅠの口径が15cmから14cmに，皿AⅡの口径が10cmから9cmになる法量の減少と併行して生じたと考えうる。小型の皿の調整に適した1段撫で面取り手法が，まず小型皿AⅡに採用され，次いで大型皿AⅠに及んだともいえる。

皿AⅠの主体が2段撫で手法(C_3～C_5類)のものであり，皿AⅡの主体が1段撫で手法

表8　ＳＥ30出土の土師器皿
（平安京Ⅳ期中段階）



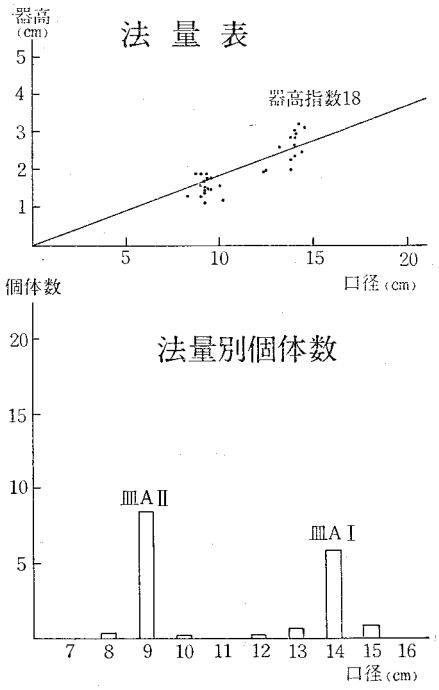
口縁＼口径	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
C_3類	0	0	6.4	3.6	0	0	0	13.3	0	0
C_4類	0	0	1.6	9.4	0	0	0	0	0	0
C_5類	0	16.9	5.2	3.6	0	0	0	63.3	33.3	100
D_3類	0	0	14.0	10.8	0	0	30.8	0	33.3	0
D_4類	100	83.1	72.8	72.6	100	100	69.2	23.4	33.3	0

法量別口縁部形態の比率（単位%）

口縁＼規格（口縁例）	皿AⅡ	皿AⅠ
C_3類	4.9%	12.3%
C_4類	6.1%	0%
C_5類	3.5%	33.9%
D_3類	12.1%	12.3%
D_4類	73.4%	41.5%

規格別口縁部形態の比率

表9　ＳＤ13出土の土師器皿
（平安京Ⅳ期新段階）



口縁＼口径	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
C_3類	—	0	21.7	0	—	0	0	16.4	0	—
C_4類	—	0	0	0	—	0	0	3.6	0	—
C_5類	—	0	0	0	—	0	40	37.9	0	—
D_3類	—	0	3.9	0	—	0	0	0	0	—
D_4類	—	100	74.4	100	—	100	60	42.1	100	—

法量別口縁部形態の比率（単位%）

口縁＼規格（口縁例）	皿AⅡ	皿AⅠ
C_3類	9.2%	12.9%
C_4類	0%	2.8%
C_5類	0%	33.2%
D_3類	14.8%	0%
D_4類	76.0%	51.1%

規格別口縁部形態の比率

(D_3・D_4類)のものであるＳＥ22が平安京Ⅳ期古段階にあたり，皿ＡⅡでも１段撫で手法(D_3・D_4類)が増加し，２段撫で手法の中では面取りを施すC_5類が主体となるＳＥ30は平安京Ⅳ期中段階にあたる。皿ＡⅠ・ＡⅡともに１段撫で面取り手法(D_4類)のものが主となるＳＤ13は平安京Ⅳ期新段階にあたる。

ＳＤ11上層(表10，Ｐ34)　皿ＡⅠは口径14cmに中心があるが，12～13cmのものも存在する。口縁部形態はC_3類が5.7%，C_5類が2.9%，D_5類が91.4%であり，D_5類が大多数を占める。皿ＡⅡは口径９cmに中心があり，８cmのものもある。口縁部形態はC_3類が1.7%，C_5類が1.0%，D_3類が16.6%，D_5類が80.7%であり，D_5類が主体をなすが，粘土円板の端部を折り曲げて弱く内彎させただけの作りが粗雑なD_3類も増加する。

ＳＤ06(表11，Ｐ38)　本遺構では時期が遡る小量のものを除くと，皿ＡⅠの口径は，12cmに中心がある。口縁部形態はC_3類が2.8%，D_5類が85.1%，D_6類が12.1%であり，１段撫で面取り手法(D_5・D_6類)のものが約97%に達する。皿ＡⅡは口径８cmのものが９cmのものよりやや多くなる。口縁部形態はC_3類が1.1%，D_3類が13.2%，D_5類が55.1%，D_6類が30.6%であり，扁平なD_6類が増加する。

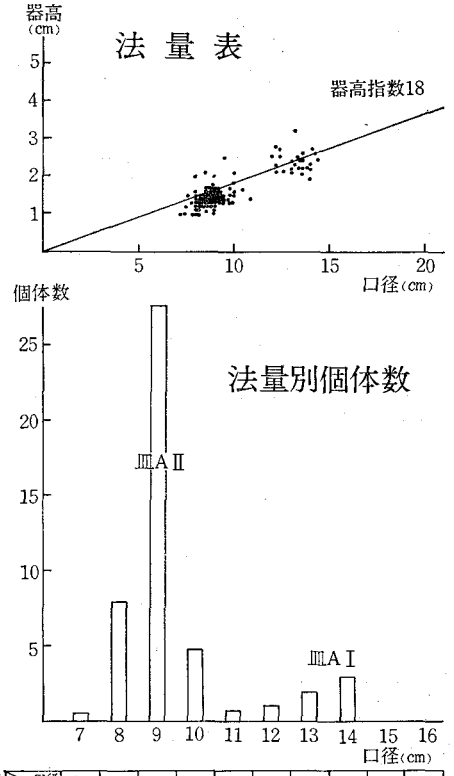
中世京都Ⅰ期には大型皿ＡⅠも小型皿ＡⅡも１段撫で面取り手法(D_5・D_6類)によるものが主体をなすが，皿ＡⅡでは口縁部の面取りが明確でないものが次第に増す。また土師器皿の法量の減少が著しい。

中世京都Ⅰ期古段階の皿では，平安京Ⅳ期新段階とほぼ同じ法量をもつが，口縁部と底部の境が屈曲するD_5類の比率が増す。そして皿ＡⅠに12～13cmのものが増加して，皿ＡⅠ・ＡⅡともにD_5類の比率が最も高くなるＳＤ11上層が中世京都Ⅰ期中段階にあたる。なお，この時期に小量であるが椀が現われる。それに対して，皿ＡⅠの口径が12cmを中心とし，皿ＡⅡにも口径８cmのものが増すＳＤ13が中世京都Ⅰ期新段階にあたる。この時期には皿ＡⅡで１段撫で面取り手法の比率が低下し，灰白色の椀が増加する傾向にある。

ＳＫ10(表12，Ｐ38)　皿と椀がある。皿ＡⅠは口径11cmに中心があり，10・12cmのものもある。口縁部形態は，E_1類49.4%，E_3類50.6%である。皿ＡⅡは口径８cmに中心があり，７cmのものも小量ある。E_1類が58.4%，E_3類が41.6%である。灰白色の椀ＡⅠは口径12cmに，椀ＡⅡは口径７cmに中心がある。椀は土師器総量の36.0%であり，そのうち凹み底小椀は椀ＡⅡの73.7%を占める。

中世京都Ⅱ期には，口縁端部面取り手法がすたれて，１段撫で手法ｂ群(Ｅ類)によるものが増加する。また従来の皿ＡⅠ・ＡⅡに加えて，灰白色の椀ＡⅠ・ＡⅡがさらに増加し，

表10　ＳＤ11上層出土の土師器皿
（中世京都Ⅰ期中段階）



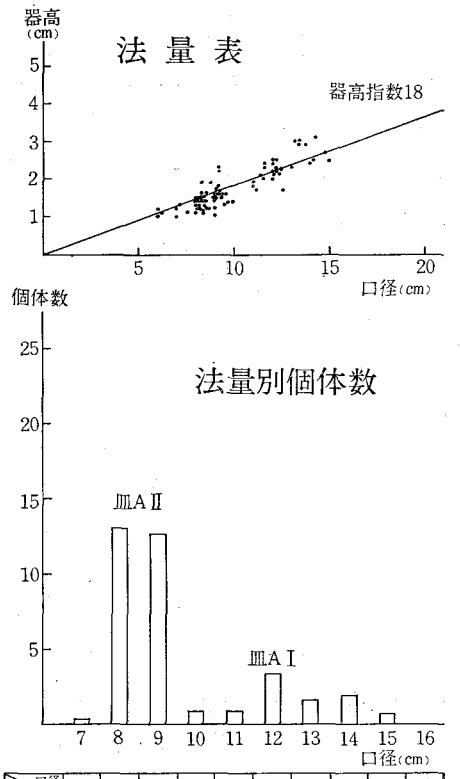
口縁＼口径	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
C_3類	0	2.5	0.8	0	21.1	0	0	5.8	—	—
C_5類	0	0	1.3	6.2	0	0	7.9	5.8	—	—
D_3類	0	16.8	15.7	22.0	0	0	0	0	—	—
D_5類	100	80.7	82.2	71.8	78.9	100	92.1	88.4	—	—

法量別口縁部形態の比率（単位%）

口縁＼規格	口縁例	皿AⅡ	皿AⅠ
C_3類		1.7%	5.7%
C_5類		1.0%	2.9%
D_3類		16.6%	0%
D_5類		80.7%	91.4%

規格別口縁部形態の比率

表11　ＳＤ06出土の土師器皿
（中世京都Ⅰ期新段階）



口縁＼口径	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
C_3類	0	0	2.3	0	0	0	10.3	0	0	—
C_5類	0	0	0	0	0	0	0	32.7	38.9	—
D_3類	0	9.0	17.6	38.1	0	0	0	12.2	33.3	—
D_5類	0	59.9	50.0	61.9	76.2	85.2	89.7	55.1	27.8	—
D_6類	100	31.1	30.1	0	23.8	14.8	0	0	0	—

法量別口縁部形態の比率（単位%）

口縁＼規格	口縁例	皿AⅡ	皿AⅠ
C_3類		1.1%	2.8%
D_3類		13.2%	0%
D_5類		55.1%	85.1%
D_6類		30.6%	12.1%

規格別口縁部形態の比率

（本遺構には時期が遡るものを小量含み、上の規格別表ではそれを除いた数値を示した。）

小型椀AⅡの中では凹み底小椀の比率が増す。

中世京都Ⅱ期古段階では，ⅢAⅠに1段撫で面取り手法を残すD_6類があるが，E_1類が主となる。また椀AⅡでは凹み底小椀の占める比率は高くない。SK10はE_3類の比率が約50%になり，凹み底小椀が椀AⅡの70%以上を占めて，中世京都Ⅱ期中段階にあたることが判る。またこの時期は椀の器壁が薄く作りが丁寧であることに特色がある。中世京都Ⅱ期新段階には，椀の器壁が厚くなり，椀AⅠには法量の規格が変化する傾向がある。またⅢAⅠではE_4類の比率が増す。

以上にあげた平安京Ⅲ期から中世京都Ⅱ期にいたる土師器は，大・小2種の規格を基本とし，口縁部形態が法量の減少と密接な関係をもって変化したと考えうる。それに対して平安京Ⅱ期には杯とⅢの区別があり，中世京都Ⅲ期にはⅢの規格が増加して，本調査区で主体をなすものとの差が大きい。ここであげたものは，土師器の変化からみて，大きくは一つのまとまりをなす時期のものである。

各期の年代　以上で考察した土師器の各期の正確な実年代を知ることは困難であるが，他遺跡の例と今回の調査とによって得られた知見を記す。

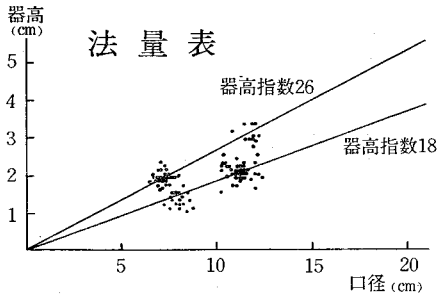
遺構の実年代が判り，良好な遺物が出土した例は次の3例がある。平城上皇没年(824年)に年代の下限をもつ平城京SE311B様式の土師器〔奈文研62〕は平安京Ⅰ期古段階にあたり，平安宮内からは，これに先行する最古段階の資料が出土している[1]。寛治5(1091)年5月13日の墨書がある須恵器鉢が出土した平安京左京四条一坊SE-8出土の土師器[2]は平安京Ⅲ期新段階にあたる〔平安京調査会75〕。天文1(1532)年に焼け落ちたと考えうる山科寺内町第2号石室出土の土師器は中世京都Ⅳ期中段階にあたる[3]。このことから，きわめておおまかではあるが，平安京Ⅰ～Ⅳ・中世京都Ⅰ～Ⅳ期の8期は，8世紀末から16世紀中葉にかけての約800年であり，各期は100年を前後する期間と予想される。また，各期の古・中・新の小期は型式学的にみて連続的なものであり，各期をほぼ3等分すると考える。

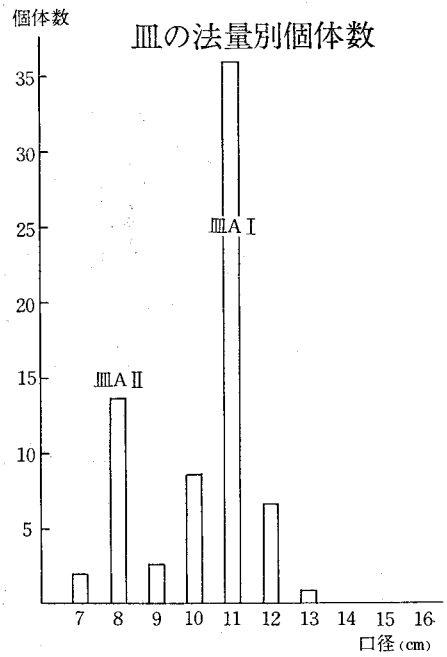
付近の遺跡で編年研究が行なわれているのは，同志社大学キャンパス内の遺跡である〔同志社調査会78b〕。同遺跡におけるⅠ期は平安京Ⅳ期，Ⅱ期は中世京都Ⅰ期，Ⅲ期は中世京都Ⅱ期にほぼ相当し，それぞれ12・13・14世紀ごろの年代が与えられている。

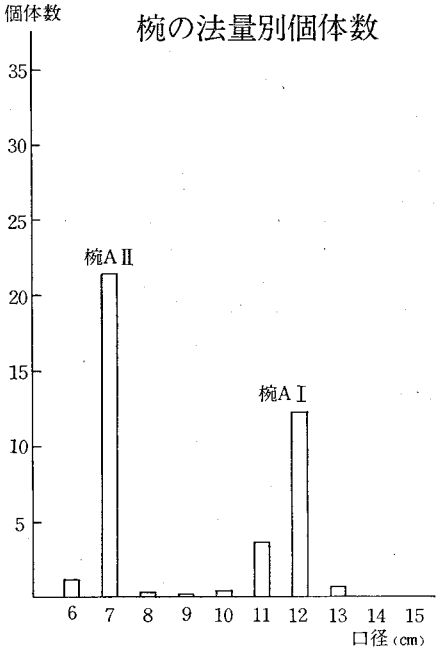
本調査区では実年代の判る遺構や焼土層，紀年のある遺物は出土しなかったが，遺跡の盛衰と，関連する文献資料(表13)とをあわせて上述の年代観を考察すると次のように理解することができる。

遺跡から出土した土器・陶磁器の量を時期別にまとめると表14の通りである。本調査区

表12　ＳＫ10出土の土師器皿・椀（中世京都Ⅱ期中段階）







口径	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
E_1類	64	57.9	56.2	39.4	51.9	49.1	34.8	—	—	—
E_3類	36	42.1	43.8	60.6	48.1	50.6	65.2	—	—	—

皿法量別口縁部形態の比率（単位%）

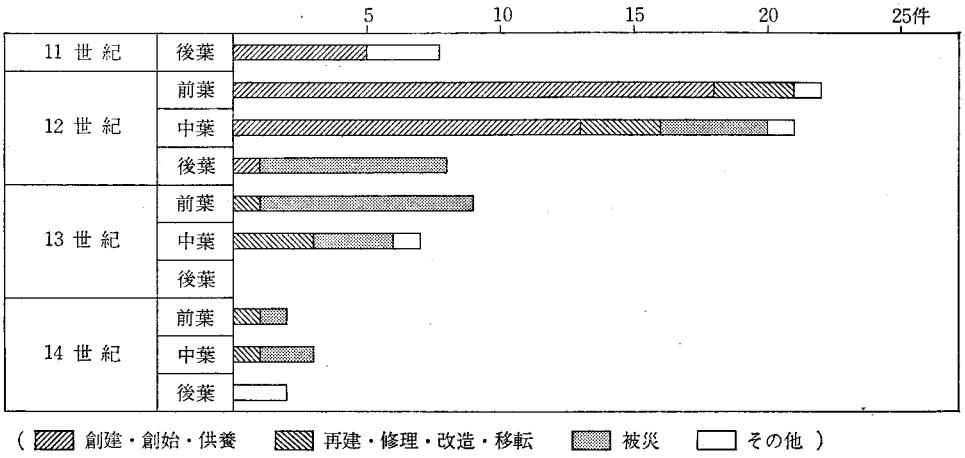
口縁 ＼ 規格 / 口縁例		皿AⅡ	皿AⅠ
E_1類		58.4%	49.4%
E_3類		41.6%	50.6%

皿規格別口縁部形態の比率

比率 ＼ 分類	皿AⅡ	皿AⅠ	椀AⅡ	椀AⅠ
総量との比率	16.6%	47.4%	20.9%	15.1%
器種内での比率	26.0%	74.0%	58.0%	42.0%
凹み底の比率	0%	0%	73.7%	0%
器種の比率	64.0%		36.0%	

皿・椀・凹み底椀の比率
（総個体数110）

表13 関連文献資料の数量と構成（表21参照）

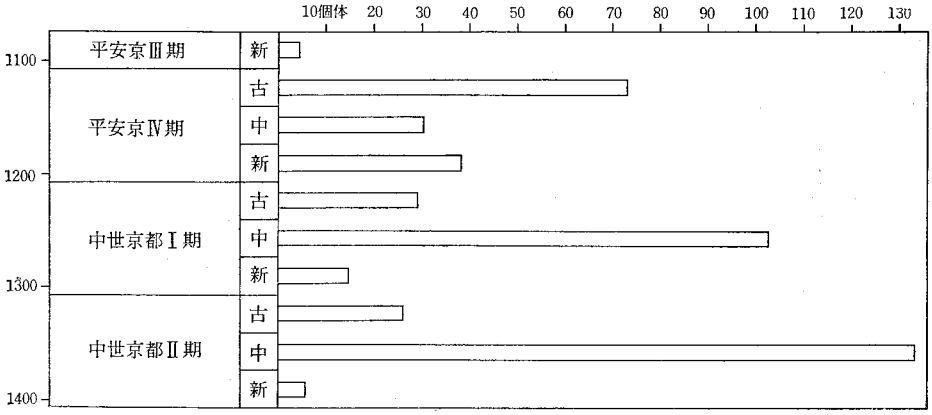


では，護岸跡を除く，井戸・溝等の遺物は平安京Ⅲ期新段階から出土しはじめる。そして出土量が著しく多い時期は平安京Ⅳ期古段階，中世京都Ⅰ期中段階，中世京都Ⅱ期中段階である。中世京都Ⅱ期新段階以後は遺物の出土量が急速に減少する。これと文献資料(表13)とを対比すると，遺物量の増加に反して，文献に現われる頻度が低下することが判るが，文献資料のうち創建・再建等の建築関係の記事と比較すると一定の関係のあることが判る。

鴨東の本遺跡一帯が本格的に開発されるのは，法勝寺が造営される承暦1(1077)年以後のことである〔宇野79〕。また本調査区は平安後期には，岡崎を中心とする遺跡群，特に白河北殿の北辺にあたり，院の近臣の役宅があった〔川上77〕。この白河北殿が院の御所として完成移徒されるのは元永1(1118)年7月10日であり，大治4(1129)年には，改造され北へ拡張されている〔杉山62〕。そして12世紀の文献をみると，建築関係の記事が最も多いのは12世紀前葉である。遺物の出土量が多い平安京Ⅳ期古段階はこのころにあたる可能性が強い。

中世京都Ⅰ期中段階には，従来あった遺構の多くを埋積する形で多量の土器が投棄されている。12世紀後葉から13世紀にかけては建築関係の記事が減少し被災関係の記事が増加するが，この間でやや被災記事が少なく建築関係の記事が多いのは13世紀中葉である。保元の乱で焼失した白河北殿の付近には寿永2(1183)年に，崇徳院と藤原頼長の霊を鎮めるため粟田宮が営まれるが，粟田宮は康元1(1256)年に焼失し，再建されたとする記事等が中世京都Ⅰ期中段階の遺物量の増加と関連する可能性がある(表21)。

表14　出土遺物総量の変化（主要遺構出土品で残存率1/6以上のもの）



14世紀には本遺跡付近の記録は少ないが，前・中葉には建築関係の記事があり，後葉にはない。また14世紀後葉にはそれまでと性格を異にする記事がある。鎌倉時代には本遺跡の北に藤原北家勧修寺家流の本拠である吉田遺跡の中心地があったが，この勢力は南北朝の内乱時，南朝方に加担したため没落する〔泉80〕。これを示すのが永徳４(1384)年の足利義満寄進状である。同寄進状によると，「東は神楽岡西，南は近衛末，西は河原(鴨川)，北は土御門末を限る」吉田遺跡の主要な地域が神領として吉田社に寄進される。また応永３(1396)年には足利義持が本調査区を含む，「近衛以南，大炊御門以北，今辻子以西，至于河原(除崇徳院，大吉祥院敷地)」の熊野神社境内管領を聖護院に命じる〔川上77〕。本調査区では中世京都Ⅱ期中段階に遺物の出土量が多いが，同新段階には出土量が激減して，近世京都Ⅲ期(江戸後期)に至る。本遺跡付近では14世紀になると遺跡の性格が大きく変わるが，この出土遺物が減少する時期を14世紀後葉ごろとすると，上のような大きな動きのある時期と一致する。

以上の諸点から，直接的な証拠は少ないが，平安京Ⅳ期・中世京都Ⅰ期・中世京都Ⅱ期は，ほぼ12・13・14世紀にあたり，古・中・新の各段階は各期をほぼ３等分するものと考える。

土師器については，本遺跡以外のより良好な発掘例を加えることによって，各期をさらに細かく分期することが可能である。しかしより重要な課題は，他の種類の土器・陶磁器との関係を知ることにある。ただし，種類が異なり，扱い方にも差があったと予想される土器・陶磁器の共伴関係を知るためには，より良好な一括遺物を多数検討することが必要である。土師器の年代の考察に瓦器や陶磁器の年代を採用しなかったのは異なる種類の土

器・陶磁器についてはその共伴関係を明確にし土器様式を確立することが先決と考えるからである。ただし，本遺跡の資料だけでは，土器様式を設定するには十分でないため，次節以下では各遺構での共伴関係を基礎資料として示すことにする。

3 瓦　　器

瓦器は，椀，皿，盤，羽釜，鍋，口付手鍋等がある。このうち平安京Ⅲ期新段階～同Ⅳ期古段階の土師器と共伴した瓦器は椀だけであり，以後は瓦器の器種がしだいに増加する。また椀と皿は楠葉産と考えうるものが大部分を占め，和泉産のものも小量ある[4]。その比率は6.3：1である。

椀300は楠葉産の瓦器椀であり[5]，内面に丁寧な暗文を，外面にはわずかに間隔のあく暗文を施し，横撫でによって口縁部が直線的になる。本例は橋本久和のいうⅠ－3期にあたり〔橋本80〕，平安京Ⅲ期新段階の土師器と共伴している(図版17ＳＥ25)。椀392・393は口縁部が内彎し，内面はわずかに間隔のあく暗文，外面には間隔のあく暗文を施す。Ⅱ－2期にあたり，平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している(図版18ＳＥ30)。またこれと共伴した瓦器小椀394は内面に丁寧な暗文を施し，整った断面三角形の高台をもつ。なお小片であるため実測ができなかったがⅡ－1期にあたる瓦器椀の破片がＳＥ40で平安京Ⅳ期古段階の土師器と共伴している。椀429は器壁が薄く，内面に省略した暗文，外面には口縁部付近にわずかに暗文を施し，Ⅱ－3期にあたる。この椀は平安京Ⅳ期新段階の土師器と共伴した(図版19ＳＤ13)。小椀132は，394より内面の暗文が粗雑であり高台も作りが悪い。またⅡ－3期にあたる瓦器椀133と平安京Ⅳ期新段階の土師器とが共伴している(図11ＳＥ18)。皿457は口径8.5cmであり，口縁部が外反して見込みに鋸歯状の暗文を施す。法量からみてⅢ－1期ごろと予想されるが，暗文は崩れていない。見込みに崩れた螺旋状の暗文を施す瓦器椀458と中世京都Ⅰ期古段階の土師器とを共伴している(図版19ＳＤ11中層)。

椀519・520は内面に渦巻状の暗文，見込みに崩れた螺旋状の暗文を施し，Ⅲ－2期にあたる。これは中世京都Ⅰ期中段階の土師器を伴出している(図版20ＳＤ11上層)。なお本調査区では中世京都Ⅰ期新段階以後の土師器と瓦器とが共伴した例を得ていないが，付近の同志社大学キャンパス内の遺跡では，Ⅳ期の瓦器椀が中世京都Ⅱ期の土師器と共伴している〔同志社調査会78ｂ〕。これらの共伴関係から，橋本久和のいうⅡ－1～Ⅱ－3・Ⅲ－1～Ⅲ－3期の瓦器はそれぞれ平安京Ⅳ期古～新段階・中世京都Ⅰ期古～新段階の土師器に対応すると考える。また想定した実年代も一致する。

盤395・396は平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴し(図版18ＳＥ30)，本調査区で最も年代

の遡る瓦器盤である。すべて器壁が厚く，体部が内彎し，口縁端面が水平をなす。底部外面には籾圧痕を残す。395には内外面に，396は内面に磨きを施すが，撫でを施すだけのものもある。この形態の系譜をひくものは盤515のように中世京都Ⅰ期中段階の土師器と共伴した例がある(図版20ＳＤ11上層)。それに対して，盤556は口縁端面が丸味をもち，端部が内側に肥厚する。また器壁がやや薄く，体部は弱く外反して立ち上がる。胎土には砂粒を多く含み，炭素の吸着も悪い(図版21ＳＤ06)。中世京都Ⅰ期新段階以後の土師器と共伴する瓦器盤は，この形態をとるものが多く，その中には胎土に砂粒を多く含み炭素が吸着しない，土師器とみなしうるものもある。

瓦器羽釜には口縁部が内彎し３脚がつくもの(１ａ類)，口縁部が内彎し３脚がつかないもの(１ｂ類)，口縁部が短く直立するもの(２類)，口縁部が直立しやや発達したもの(３類)，口縁部が長く直立するもの(４類)がある〔宇野78〕。なお口縁部が直立する羽釜には３脚のついた例がない。口縁部が内彎する羽釜１類は，平安京Ⅳ期新段階・中世京都Ⅰ期古段階の小量の土師器と共伴した例があり，確実には中世京都Ⅰ期中～新段階の土師器に共伴している(図版20ＳＤ11上層，図13ＳＥ19)。口縁部が短く直立する羽釜２類は小片が中世京都Ⅰ期中段階の土師器を出土したＳＤ01にあり，また羽釜557は中世京都Ⅰ期新段階の土師器と共伴している(図版21ＳＤ06)。他方，付近の京都大学医学部構内ＡＯ18区ＳＫ16では平安京Ⅳ期新段階～中世京都Ⅰ期古段階の土師器にこの種の羽釜２類が共伴している〔京大埋文研79第６図〕。このことから，中世京都Ⅰ期を通じて口縁部が内彎する羽釜１類と，短く直立する羽釜２類とが共存したことが判るが，主体は羽釜１類にある。このほか口縁部が直立し，やや発達した羽釜３類の小片はＳＫ04で中世京都Ⅱ期中段階の土師器に共伴した。口縁部が長く直立する羽釜４類の253～257は，中世京都Ⅲ期新段階の土師器と共伴している(図15ＳＤ24)。中世京都Ⅱ期には口縁部が直立する羽釜３類が主体となり，中世京都Ⅲ期の口縁部が長く直立する羽釜４類につながっていくようである。

瓦器鍋は，２段に屈曲する口縁部をもつが，この屈曲が顕著なものと，甘いものとがある。口縁部が顕著に屈曲する瓦器鍋は，中世京都Ⅰ期中・新段階の土師器と共伴した例があり(図版20ＳＤ11上層，図14ＳＥ15)，屈曲が甘い例は中世京都Ⅱ期中段階の土師器と共伴している(図版21ＳＫ10)。なお本調査区では中世京都Ⅰ期中段階を遡る土師器と瓦器鍋の共伴例がないが，平安京左京四条一坊ＳＤ－３黄褐色砂層では平安京Ⅳ期新段階ごろの土師器と瓦器鍋，及び口縁部が内彎する瓦器羽釜とが共伴している〔平安京調査会75〕。

瓦器口付手鍋は出土例が少ないが，ＳＤ04とＳＫ04で小片が中世京都Ⅱ期古～中段階の

土師器と共伴した。

以上の瓦器と土師器との関係をみると，土師器皿と瓦器椀の変化はほぼ対応し，また平安京Ⅳ期中段階以前の土師器と共伴する瓦器には椀・皿以外の器種がないといえる。平安京Ⅳ期中段階以後は瓦器の器種が次第に増加して，瓦器椀の占める比率が低下していくのである。

4 須恵器

須恵器はすり鉢と甕とが大多数を占め，椀や壺等はごく小量である。

すり鉢は播磨東部で生産されたと想定されるものが主体をなし，その口縁部形態には一連の変化がある。口縁端面が外面と直角をなし，外側へ張り出すもの(1類)，口縁端面が外面と直角をなすもの(2類)，口縁端面が外面と鈍角をなすもの(3類)，口縁端面が丸味をもって肥厚するもの(4類)[6]，口縁端面が上下に拡張するもの(5類)等がある〔宇野78〕。土師器との共伴例としては1類(360)と平安京Ⅳ期古段階の土師器(図版17ＳＥ40)，2類(115・398)と平安京Ⅳ期中段階の土師器(図11ＳＥ26，図版18ＳＥ30)，3類(134・182・183)と平安京Ⅳ期新段階・中世京都Ⅰ期中段階の土師器(図11ＳＥ18，図13ＳＥ17)，4類の小片と中世京都Ⅰ期新段階の土師器(図14ＳＥ15)，5類(232)と中世京都Ⅱ期中～新段階の土師器(図14ＳＫ08)等の例がある。これらと異なる共伴例もあるが，すり鉢1・2類は平安京Ⅳ期古～中段階の土師器，すり鉢3類は平安京Ⅳ期新～中世京都Ⅰ期古段階の土師器，すり鉢4類は中世京都Ⅰ期中～新段階の土師器，すり鉢5類は中世京都Ⅱ期の土師器と共伴する例が多い。

なお規格にもいくつかの種類があるが，小片が多く，規格を問題としうるだけの量を得ていない。なお上記のものと異なる系譜に属するものが小量ある。すり鉢340には外方に踏んばる高台があり焼成が悪い(図版17Ｅ12層)。すり鉢397は口縁端部が丸く胎土は精良で焼成が良い(図版18ＳＥ30)。すり鉢340は平安京Ⅳ期古段階，397は同中段階の土師器と共伴している。

甕には口縁端部が肥厚するものと素縁のもの，頸部が外反するものと直線的であるもの，胴部が球形に近いものと長胴のもの等がある。外面の叩きには格子叩きと平行叩き及び細かい綾杉状の叩き等があり，頸部に叩きを残すものと撫であるいは削りでそれを消すものとがある。また外面に叩き目を残さないものもある。甕にはこのようにいくつかの種類があるが，これらを系譜に別けて分類することは，まだできていない。おおよその傾向としては，平安京Ⅳ期の土師器に共伴するものには格子叩き，中世京都Ⅰ期の土師器に共伴す

るものには平行叩き，中世京都Ⅱ期の土師器に共伴するものには細かい綾杉状の平行叩きを施すものが多いといえる。

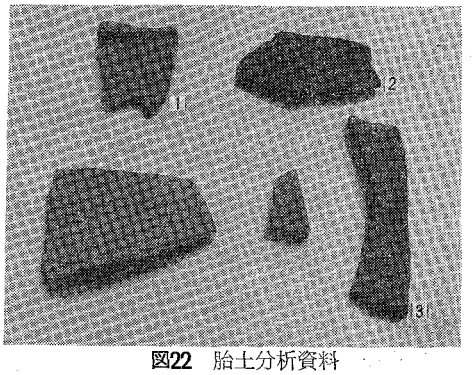


図22　胎土分析資料

これらのうち22点について胎土分析を行ない，うち3点の甕については産地が同定されている〔楢崎ほか79〕。資料番号京大1は胴部外面に細かい綾杉状の叩き，内面に刷毛目と撫でを施す。口縁部が外反し頸部外面に右上がりの叩きを残す。焼成は悪く，ＳＤ08で中世京都Ⅱ期古段階の土師器と共伴した(図14-220，図22-1)。京大2は右上がりの平行叩きを残す甕。ＳＤ11中層で中世京都Ⅰ期古段階の土師器と共伴した(図版19-459，図22-2)。京大5は外面に粗い格子叩き，内面に刷毛目と撫でを施し焼成が良い。ＳＤ04で中世京都Ⅱ期古～中段階を中心とする土師器と共伴している(図22-3)。分析は主成分を原子吸光分析法により，その結果から，粘土化率と酸性度を計算して行なわれた。その結果，京大1・2は，兵庫県三木市与呂木10号窯と同明石市江井ケ島出張窯の製品に，京大5は岡山県勝田郡勝間田町夫婦岩窯の製品に近似することが示されている。

5　陶　磁　器

陶磁器は，灰釉系陶器，中国製陶磁器，朝鮮製青磁が出土している。

灰釉系陶器　　椀，皿，壺，甕，すり鉢が出土している。(7)

本調査区で灰釉系陶器椀・皿(山茶椀・山皿)が土師器と共伴した最も古い例はＳＥ25である。椀は小片であり実測できないが，愛知県猿投山西南麓古窯址群(以下，猿投窯と略す)の製品であり，器壁が薄く，口縁部が外反する。共伴した土師器は平安京Ⅲ期新段階であるが，その中でも末期にあたり，年代は11世紀末～12世紀初め頃であろう。皿341も猿投窯の製品であり，断面梯形の高台を持ち，その畳付けに籾圧痕を残す。口縁部は外反し，口径9.0cmを計る（図版17Ｅ12層)。楢崎彰一のいう猿投三筋文陶器Ⅲ期(12世紀第2四半期)〔楢崎78〕に併行するものであり，平安京Ⅳ期古段階の土師器と共伴した。その想定した年代に大きな差はない。椀460は愛知県知多古窯址群の製品である。器壁は薄く，体部は直線的に低く立ち上がり，断面三角形のしっかりした高台を持つ（図版19ＳＤ11中層)。常滑三筋文陶器第2段階(12世紀第2四半期）に併行するものであり，中世京都Ⅰ期古段階の土師器と共伴した。椀522は猿投窯の製品であり，器壁が厚く，体部が丸味をも

って立ち上がる。断面三角形で小さな高台をもち，底部内面に指撫でを施す(図版20ＳＤ11上層)。三筋文陶器Ⅴ期(12世紀第４四半期)かそれより若干年代が降るものであり，中世京都Ⅰ期中段階の土師器と共伴した。このように椀460・522については，編年の序列が土師器と一致するが，想定した実年代は土師器が１小期分程度は新しいという結果を得た。この程度の差は土師器と陶磁器の使用期間の差とみなすべきか，いずれかの年代観を補正するべきかの判断は資料の増加を待つ。

灰釉系陶器壺・甕はすべて常滑の製品と思われる。楢崎彰一・赤羽一郎のいう古常滑第Ⅰ～Ⅳ段階〔楢崎75，赤羽77〕の壺・甕の破片が出土しているが，包含層や出土遺物に年代幅がある遺構から出土した例が多く，共伴関係が判る資料を得ていない。平安京Ⅳ期の土師器を出土する遺構では，常滑甕の出土量はごく少なく，中世京都Ⅰ～Ⅱ期の土師器を出土する遺構では，小量は共伴することが多い。

灰釉系陶器すり鉢521は猿投窯の製品である。口縁部が弱く外反して端部が面をなし，高い高台がつく。猿投三筋文陶器Ⅳ期(12世紀第３四半期)にあたり，共伴した椀522や中世京都Ⅰ期中段階の土師器より年代が遡る(図版20ＳＤ11上層)。

中国製陶磁器　白磁，青白磁，青磁，褐釉陶器，黄釉鉄絵陶器，緑釉陶器がある。

白磁327は小ぶりの玉縁口縁がつく椀であり，横田賢次郎・森田勉のいう白磁椀Ⅱ類の口縁部にあたる(図版17ＳＥ22)〔横田・森田78〕。本調査区で小ぶりの玉縁口縁がつく白磁椀で伴出遺物が判る例は，この１点であり，平安京Ⅳ期古段階の土師器と共伴している。大ぶりの玉縁口縁がつく白磁椀463・594は白磁椀Ⅳ類の口縁部にあたり，それぞれ中世京都Ⅰ期中段階，中世京都Ⅱ期中段階の土師器と共伴している(図版20ＳＤ11上層，図版21ＳＫ10)。口縁部が外折し，輪花になる白磁椀431は白磁椀Ⅴ－３・ｃ類にあたり，平安京Ⅳ期新段階の土師器と共伴した(図版19ＳＤ13)。このほか口縁端部が外折し，白磁椀Ⅴ～Ⅷ類のいずれかにあたる白磁椀小片が，平安京Ⅳ期中・新段階，中世京都Ⅰ期中段階の土師器と共伴した例がある(ＳＥ29，ＳＥ17，ＳＤ01)。白磁椀401は口縁部が弱く外反し，釉調が黄灰色を呈する(図版18ＳＥ30)。白磁皿Ⅵ類と同じ特徴をもつ椀であり，平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している。

白磁椀底部328は，底部が厚く，高台を低く削り出す(図版17ＳＥ22)。白磁椀Ⅳ－１類の底部にあたり，平安京Ⅳ期古段階の土師器と共伴している。白磁椀底部432は，高台外面を垂直に，内面を斜めに削り出し，白磁椀Ⅱ類の底部にあたる(図版19ＳＤ13)。これは平安京Ⅳ期新段階の土師器と，高台の外面を垂直に，内面は段をもって削り出す白磁椀433と

に共伴している。また白磁椀462・222は見込み周縁の釉を蛇の目状に掻き取り，白磁椀Ⅷ類の底部にあたる(図版19ＳＤ11中層，図14ＳＤ08)。中世京都Ⅰ期古段階，同新段階の土師器に共伴している。

なお白磁椀底部363は，胎土が青味を帯びる。高台の形状も，断面四角形の輪高台であり他の白磁と異なる特徴をもつ(図版17ＳＥ40)。越州窯系青磁の系譜を引くものと想定され，平安京Ⅳ期古段階の土師器に共伴している。

白磁皿は釉調が乳白色で高台のあるものとないもの，黄灰色で高台のないものがある。白磁皿362は，高台があり，口縁端部を丸くおさめる(図版17ＳＥ40)。白磁皿Ⅱ－１・ａ類にあたり，平安京Ⅳ期古段階の土師器と共伴している。白磁皿343は釉調が乳白色，高台がなく，上げ底であり，口縁部が外折する(図版17Ｅ12層)。白磁皿Ⅳ－１・ａ類に類似するが，高台状の削り出しはなく，平安京Ⅳ期古段階にあたる土師器に共伴している。白磁皿403は釉調が乳白色，口縁部が内彎し薄く，見込みに櫛描き文を施す(図版18ＳＥ30)。白磁皿Ⅶ－１類にあたり，平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している。白磁皿344・402は釉調が黄灰色で，口縁部が内彎し，平底である(図版17Ｅ12層，図版18ＳＥ30)。白磁皿Ⅵ－１・ａ類にあたり，それぞれ平安京Ⅳ期古・中段階の土師器と共伴している。

白磁皿404は高い高台と，直立して外折する口縁端部をもち，見込みに篦・櫛描きの花文を施す(図版18ＳＥ30)。景徳鎮の製品と推測され，平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している。

白磁壺342は，口縁部の折り返しが弱く，平安京Ⅳ期古段階の土師器に共伴している(図版17Ｅ12層)。また白磁水注464・560は，それぞれ中世京都Ⅰ期古・新段階の土師器と共伴している(図版19ＳＤ11中層，図版21ＳＤ06)。

以上を簡単にまとめると，平安京Ⅳ期古段階の土師器に伴なう白磁としては，小ぶりの玉縁口縁をもつ椀があり，大ぶりの玉縁口縁をもつ椀や，口縁端部が外折する椀もあると考えうる。皿には，高台がありロ縁端部を丸くおさめるもの，高台がなく口縁端部が外折するもの，口縁部が内彎して薄く，見込みに花文を施すもの等がある。また釉調が黄灰色で高台がなく口縁部が内彎する皿があり，これと同様の椀もある。このように，平安京Ⅳ期古段階の白磁椀・皿には多くの種類があり，以後平安京Ⅳ期新段階ごろから，種類と量を減じていく。この中で大ぶりの玉縁口縁をもつ椀は中世京都Ⅱ期の土師器との共伴例があるものの，中世京都Ⅰ期以後の土師器と共伴する例は少なくなる。口縁端部が外折する椀は中世京都Ⅰ期の土師器との共伴例があり，外折の部分がやや丸味をもつ。また見込み

の釉を蛇の目状に掻き取るものが増す。口禿げの椀・皿の，良好な資料は得ていない。

青白磁でまとまった共伴遺物が判るのは皿405のみである(図版18ＳＥ30)。高台がなく見込みに崩れた花文を施し，平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している。このほか椀32は口縁端部が外折し，輪花状になる青白磁椀であり平安京Ⅳ期古段階～中世京都Ⅰ期中段階ごろの土師器と共伴している(図８ＳＤ12)。また青白磁合子蓋91は平安京Ⅳ期古段階～中世京都Ⅰ期古段階ごろの土師器と共伴した(図10ＳＤ09)。また，型押しによる陽刻花文青白磁椀289が攪乱層から出土し(図16)，同小片がＳＤ13で中世京都Ⅰ期古～新段階の土師器と共伴した。

龍泉窯系青磁は椀が大多数を占める。椀523～525は内面に片切り彫り花文を施し，龍泉窯系青磁椀Ⅰ－２・ｂ類にあたるが，花文は崩れている(図版20ＳＤ11上層)。中世京都Ⅰ期中段階の土師器と共伴した。同様に椀562も内面に崩れた花文を施し，中世京都Ⅰ期新段階の土師器と共伴している(図版21ＳＤ06)。本調査区で出土した龍泉窯系青磁椀では中世京都Ⅰ期古段階の土師器と共伴した小片が最も古いが，土師器出土量が少なく，確実ではない。なお外面に蓮弁文を施した龍泉窯系青磁椀も出土しているが，まとまった共伴遺物が判る例を得ていない。

同安窯系青磁椀465は外面に櫛描き垂下文，内面に櫛描き電光文と篦描き花文とを施し，同安窯系青磁椀Ⅰ－１・ｂ類にあたる(図版19ＳＤ11中層)。中世京都Ⅰ期古段階の土師器と共伴した。また同安窯系青磁皿526は，見込みに櫛描き電光文を施し，底部外面の釉を掻き取る(図版20ＳＤ11上層)。同安窯系青磁皿Ⅰ－２類にあたり中世京都Ⅰ期中段階の土師器に共伴している。

大宰府や北摂の遺跡では龍泉窯系・同安窯系青磁が12世紀中葉の土師器・瓦器に共伴することが示されているが〔横田・森田78，橋本80〕，本調査区では12世紀に比定した土師器とこれらの青磁が共伴した確実な例がない。ただしＡ５・Ａ６層出土の同安窯系青磁椀275等は遺構出土青磁より古い特徴をもち，年代が遡る可能性がある(図16)。

褐釉陶器としては四耳壺345が出土している(図版17Ｅ12層)。付近の京都大学医学部構内ＡＯ18区ＳＫ16で平安京Ⅳ期新段階～中世京都Ⅰ期古段階の土師器と共伴した褐釉四耳壺〔京大埋文研79第６図Ⅰ16〕と比較すると，肩の張りがより強く，口縁端部が水平に外折する。また器壁が薄く釉調がよい。平安京Ⅳ期古段階の土師器に共伴している。

黄釉鉄絵陶器としては盤399が出土している(図版18ＳＥ30)。口縁端部の外折した部分が長く張り出し，端部上面に目痕を残す。平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している。

緑釉陶器は盤の底部と思われる破片169が出土している(図12ＳＤ03)。見込みに刻文を施し，胎土は褐釉陶器に近い。中世京都Ⅰ期古～新段階の土師器と共伴している。

以上のように，本調査区では平安京Ⅳ期古段階の土師器に共伴する中国製陶磁器として，各種の白磁と褐釉陶器があるが，同中段階には青白磁，黄釉鉄絵陶器が加わり，中世京都Ⅰ期古段階に龍泉窯・同安窯系青磁が加わる。ただし，青磁の出現時期等については，平安京Ⅳ期中～新段階の良好な資料をより多く考察する必要がある。

6　土器・陶磁器の構成と比率

前節で，本調査区で得た，土器・陶磁器の共伴関係についての知見を示したが，本節ではこれらの土器・陶磁器がどのような比率で用いられたかを考察する。なおこのような作業は本来，土器様式を設定して年代を確定してから行なわなければならない。しかし現在の段階ではそれができていないため，遺構出土資料のうち，土師器が短い時期にまとまる資料を良好な一括遺物として扱い，その資料の時期を土師器による時期区分名で示した。土師器の時期がまとまらない資料は考察の対象から除外している。

算出した比率の信頼度と普遍性は遺物総量と遺構・遺跡の性格によって決まるため，まず時期別の遺物総量を示す(表14)。平安京Ⅳ期古段階，中世京都Ⅰ期中段階，中世京都Ⅱ期中段階の資料は比較的多く，平安京Ⅲ期新段階，中世京都Ⅱ期新段階の数値は除外した方がよいことが判る。またこれらは井戸，土坑，溝の出土品が大多数を占め，集落一般の遺構から出土したものである。そして本調査区の性格は，平安京Ⅲ期新段階～平安京Ⅳ期中段階ごろには，鴨東に拡張された平安京域の北辺にあたり，特に南に隣接する白河北殿

表15　土器・陶磁器の種類別の比率（＊は存在するが量が数値として現れないもの）

		土師器	瓦　器	須恵器	灰釉系	白　磁	青白磁	青　磁	その他	石鍋
平安京Ⅲ期	新	95.7%	4.3%		＊	＊				
平安京Ⅳ期	古	99.3%	＊	0.2%	＊	0.5%			＊	
	中	96.6%	2.7%	＊	＊	0.7%	＊		＊	＊
	新	98.6%	1.4%	＊	＊	＊			＊	
中世京都Ⅰ期	古	100%	＊	＊	＊	＊		＊		＊
	中	98.2%	0.4%	＊	1.4%	＊		＊	＊	＊
	新	100%	＊	＊	＊	＊		＊		
中世京都Ⅱ期	古	100%	＊	＊	＊					＊
	中	100%	＊	＊	＊	＊				＊
	新	100%								

の造営後(1118年以後)は，当地に院の近臣の役宅があったらしい。平安京Ⅳ期新段階以後は，粟田宮や熊野神社との関連で，別の展開があるが，中世京都Ⅰ期～中世京都Ⅱ期頃には，北に隣接する吉田遺跡(藤原北家勧修寺家流の本拠)がより盛んであった。

まず土器・陶磁器の種類別の比率をみると，土師器が最も多く，96%以上を占める(表15)。なお中世京都Ⅰ期新段階以後，土師器がほぼ100%を占めるのは，遺跡の中心から離れ，土師器を一括投棄した土器溜が多いためと考えうる。[8]

瓦器は平安京Ⅳ期新段階ごろから比率を減じ，その主体を，椀・皿から羽釜・鍋等の大型の器種が占めるようになる。

須恵器すり鉢・甕と灰釉系陶器壺・甕・すり鉢は，占める比率は高くないが，各期の遺構から，小量の破片が出土することが通例である。すり鉢・甕は灰釉系陶器より須恵器の方が多いが，中世京都Ⅰ期には灰釉系陶器の比率が増す。

中国製陶磁器の比率が数値として現われるのは，平安京Ⅳ期古・中段階であり，0.5～0.7%の数値を得ている。これは遺跡の性格の変化と密接な関係があり，この時期には通常の白磁のほかに，より高級品と考えられる青白磁も出土している。なお0.5～0.7%という数値は，大阪府高槻市の中世5遺跡における平均約1.6%〔橋本80〕，大阪府高石市大園遺跡における1%〔大園遺跡調査会76〕より少ない値である。しかし高槻市の中世5遺跡における比率は中世前期を中心とする資料について破片数で算出した数値である。本遺跡においても同様の方法で計算すると中国製陶磁器の比率は1.8%となり，高槻市におけるより，わずかに多い数値を得る。なお本調査区で残存率が1/6以上の破片数を計算すると中国製陶磁器は0.3%であり口縁部計測法による比率に近い数値を得ている。

器種別の比率をみると，平安京Ⅳ期古段階から中世京都Ⅰ期中段階にかけて，皿が96%以上を占め，土師器の占める比率とほぼ等しいが，以後はしだいに比率を減じ中世京都Ⅱ期新段階では50%以下になる(表16)。椀は平安京Ⅳ期から中世京都Ⅰ期中段階にかけて2%を前後する比率であるが，以後比率を増し，中世京都Ⅱ期新段階では50%を越える。高杯はごく小量であるが，中世京都Ⅱ期の遺構からも出土する。壺は出土例が少ないが，甕と認定した破片には壺が含まれている可能性がある。羽釜とすり鉢は平安京Ⅳ期～中世京都Ⅱ期を通じてあり，盤と鍋はやや遅れて現われる。

各種類別の器種構成をみると，土師器には皿・受皿・糸切底皿・椀・高杯・羽釜がある(表17)。皿は平安京Ⅳ期古段階～中世京都Ⅰ期中段階にかけては約95%以上を占めるが以後は比率を減じる。椀は中世京都Ⅰ期中段階に現われて以後，比率を増し，先にみた皿・

表16　器種別の比率（＊は存在するが量が数値として現れないもの）

		皿	椀	高杯	壺	甕	すり鉢	鍋	羽釜	盤
平安京Ⅲ期	新	94.3%	5.7%						＊	
平安京Ⅳ期	古	99.3%	0.5%	＊	0.2%	＊	＊		＊	
	中	97.3%	1.7%	＊	＊	＊	＊		＊	1.0%
	新	98.6%	1.4%	＊		＊	＊	(＊)	＊	＊
中世京都Ⅰ期	古	100%	＊	＊	(＊)	＊	＊		＊	＊
	中	97.1%	2.6%			＊	0.3%	＊	＊	＊
	新	94.4%	5.6%			＊	＊	＊		
中世京都Ⅱ期	古	81.9%	18.1%	＊		＊		＊	＊	＊
	中	66.9%	33.1%				＊	＊	＊	＊
	新	48.2%	51.8%							

表17　土師器の器種別比率（＊は存在するが量が数値として現れないもの）

		皿A	皿B	受皿	糸切底皿	椀A	椀B	高杯	甕・羽釜	総個体数
平安京Ⅲ期	新	76.6%		23.4%					＊	5.3
平安京Ⅳ期	古	98.5%		1.5%				＊	＊	74.0
	中	95.1%		4.9%	＊		＊	＊	＊	24.2
	新	97.2%		2.8%					＊	33.9
中世京都Ⅰ期	古	100%		＊	＊			＊	＊	9.4
	中	97.4%		1.4%	＊	1.2%				86.3
	新	94.4%	＊			5.6%				12.3
中世京都Ⅱ期	古	81.9%				18.1%		＊		17.5
	中	66.9%		＊		33.1%				120.6
	新	48.2%				51.8%				7.0

表18　各時期における瓦器，須恵器，陶磁器，石製容器の器種

		瓦器						須恵器		灰釉系陶器				中国製陶磁器					石鍋
		椀	皿	盤	羽釜	鍋	手鍋	鉢	甕	椀	皿	鉢	壺甕	椀	皿	合子	盤	壺	
平安京Ⅲ期	新	○								○				○					
平安京Ⅳ期	古	○						○	○		○			○	○			○	
	中	○		○				○	○				○	○	○		○		○
	新	○		○	○	○		○	○	○			○	○	○				
中世京都Ⅰ期	古	○	○	○	○			○	○			○	○	○	○	○			○
	中	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○		○	○
	新					○		○	○				○		○				
中世京都Ⅱ期	古	○		○	○	○	○	○	○	○			○						○
	中			○	○	○	○	○		○			○	○					○
	新																		

表19 主要器種の変遷（＊は存在するが量が数値として現れないもの）

	皿	椀	鉢	甕	羽釜・鍋
平安京Ⅳ期	土師器 99.9% 白　磁 0.1% 青白磁 ＊ 灰釉系 ＊	瓦　器 76.5% 白　磁 23.5% 灰釉系 ＊ 土師器 ＊ （青磁 ＊）	須恵器＊ （灰釉系＊）	須恵器＊ （灰釉系＊）	土師器＊ 石　鍋＊ 瓦　器＊
中世京都Ⅰ期	土師器 99.9% 瓦　器 0.1% 白　磁 ＊ 青　磁 ＊ 灰釉系 ＊	土師器 67.3% 灰釉系 20.1% 瓦　器 12.6% 青　磁 ＊ 白　磁 ＊	須恵器＊ 灰釉系＊	須恵器＊ 灰釉系＊	瓦　器＊ 土師器＊ 石　鍋＊
中世京都Ⅱ期	土師器 100%	土師器 100% 瓦　器 ＊ 青　磁 ＊ 白　磁 ＊ 灰釉系 ＊	須恵器＊ 灰釉系＊	須恵器＊ 灰釉系＊	瓦　器＊ 石　鍋＊

椀の比率の変化は土師器の器種構成の変化によって生じたことが判る。受皿・高杯・羽釜は中世京都Ⅰ期にしだいに比率を減じ皿・椀が土師器の大多数を占めるようになる。なお各期を通じて土師器は出土遺物総量の96%以上を占めているが，これは消耗率が高いためと推定され，器種構成からみると，土師器は大きな比率を占めていない。

瓦器の器種は椀が平安京Ⅲ期新段階から中世京都Ⅱ期に至るまであり，盤・羽釜・鍋・口付手鍋がやや遅れて加わる(表18)。

須恵器はすり鉢と甕が大多数を占め，ごくまれに椀が出土する。灰釉系陶器は壺・甕・すり鉢が主であり，椀・皿も出土している。

中国製陶磁器は椀・皿が主であり，これに合子・盤・壺等が加わる。

以上をもとに主要器種の変遷をみると次の通りである(表19)。皿は平安京Ⅳ期から中世京都Ⅱ期に至るまで，土師器が99.9%以上を占め，残りの0.1%弱が中国製磁器・瓦器・灰釉系陶器である。それに対して椀は平安京Ⅳ期には，瓦器が最も多く，白磁がこれに次いで，この2者で椀の大多数を占める。中世京都Ⅰ期には土師器，灰釉系陶器，龍泉・同安窯系青磁の比率が増し，瓦器と白磁は減少する。中世京都Ⅱ期には土師器が椀の大多数を占めるが，他遺跡の例では龍泉窯系青磁の比率も高まるようであり，瓦器は小量である。甕・すり鉢は須恵器と灰釉系陶器が大多数を占める。この両者では須恵器の方が多いが，中世京都Ⅰ期には灰釉系陶器の比率が高まる。羽釜・鍋は，平安京Ⅳ期には土師器が主体をなし，中世京都Ⅰ・Ⅱ期には瓦器が大多数を占める。また，各期を通じて小量の石鍋がある。

本調査区出土資料の概要は以上の通りであるが，この資料はまず南に隣接する院の御所や六勝寺関係の遺跡および北に隣接する吉田遺跡の中心地の資料と対比されるべきであり，次いで京の中心地，畿内・畿外の諸地域と比較するための基礎資料として扱うべきであろう。しかし本調査区の資料に限っても，上に示したように一定の変遷があり，また視点を変えるならば，この時期の京近郊における土器・陶磁器消費の特質をみることもできる。

本調査区の主体となる資料は中世前期(平安後期〜室町前期)[9]に属するものである。この時期，京近郊で大量に消費する土器・陶磁器には，土師器，瓦器，須恵器，灰釉系陶器，各種中国製陶磁器があり，種類が多い。他方，器種構成は，椀・皿，壺・甕・すり鉢，羽釜・鍋等が主体をなしていて中国製陶磁器の一部を除くと比較的簡素である。そして，土器・陶磁器の種類と器種との間に密接な関係を認めることができる。すなわち，中世前期の京郊における基本的な食器組成は，煮沸には楠葉をはじめとする畿内で生産した瓦器羽釜・鍋，調理と貯蔵には播磨東部を中心とする西国諸地域で生産した須恵器すり鉢・甕，及び東海地方で生産した灰釉系陶器壺・甕・すり鉢，供膳には京近郊や畿内諸地域で生産した土師器と瓦器の皿・椀，及び中国製陶磁器という組合せを想定できる[10]。

この組成は，平城京出土品にみるような，土師器・須恵器という少ない種類の土器に多くの器種があり，施釉陶器は量が少なく用途も特殊であるという古代前期の在り方とは異質である。古代後期(平安前・中期)の平安京出土品では，土師器・須恵器の器種が減少する一方，黒色土器と緑釉・灰釉陶器に多くの器種があり，中国製陶磁器は小量である。この古代後期の段階をへて，平安後期に中世前期の食器組成が確立したと考えうる[11]。中世前期の個々の土器・陶磁器は古代より作りのわるいものが多いが，その食器組成はより高度な生産と流通の体制によって成り立っていたといえるであろう。そして中世後期には，この基本的な在り方は引き継がれるが，備前をはじめとする須恵器系陶器や，東海地方で生産した施釉陶器の比率が増し，近世の段階へと連なっていくのである。

〔注〕

(1) 平安宮左兵衛府跡ＳＤ４出土品〔京文研78〕。

(2) 土師器には墨書の年代に須恵器鉢の使用期間を加えた年代を与えることができるであろう。

(3) 同遺跡を調査した国士館大学イラク古代文化研究所講師岡田保良氏から御教示を頂いた。

(4) 瓦器椀については高槻市教育委員会橋本久和氏から御教示を頂いた。

(5) 以下，産地を記さないものはすべて楠葉産と考えうるものである。

(6) 口縁端面が外反するものは４類に含める。

(7) 名古屋大学文学部教授楢崎彰一氏，同大学院修士課程斉藤孝正氏から多くの御教示を頂いた。

(8) 吉田遺跡の中心により近い京都大学医学部構内の遺跡では，この時期，土師器以外の土器・陶磁器の比率が本遺跡より高い。

(9) 院政期～南北朝期頃とする説をとる。

(10) 本遺跡では灰釉系陶器椀が比較的多く出土しているが，これは京の中心地の傾向とは異なることを京都市埋蔵文化財研究所堀内明博氏ほか多くの方々に御教示頂いた。

(11) このような動きは，平安京Ⅲ期の後半に顕著となり，平安京Ⅳ期新段階にはほとんどの要素が出揃っている。